

運動の広がりへ新しい方法、方向への 手がかりを確実につかんだ選挙戦

—若者は楽しくおもしろく、政治を変えていく—

2月5日に投票が行われた京都市長選挙は、門川大作氏22万1765票、中村和雄氏18万9971票の結果となり、現職市長の再選が決まった。ここでは民主、自民、公明からみんなの党まで支援を受けた門川氏に対し、3万票差まで追い詰めた中村陣営の動きのなかから若者にスポツトをあてて、今回の「選挙戦」を語ってもらった。

出席者

加藤伸太郎さん
川西 熟さん
中根 葉月さん
中村 陽介さん
大西 智也さん(司会)

大西 みなさん、お疲れ様でした。私たちが推した中村和雄さんは敗れたものの、今回の市長選挙はともに戦った私たちに確信を与え、次につながる大きな財産を残してくれまし

た。なかでも垣根を越えた若者たちの躍動ぶりは、かつてない勢いで選挙戦の背中を押し、広がりをつくっていったのではないのでしょうか。ここでは今回の京都市長選挙を戦ってこ

られた若いみなさんに集まっていたいただき、どういった選挙だったのか、次につながる方向は見えてきたのか、選挙戦を通して自分たちのなかに何が残ったのか等々、率直な気持ちをお聞きしたいと考えています。はじめに簡単な自己紹介もかねて、今回の京都市長選挙を戦った感想をお聞かせください。

中根 私は4年前の市長選のときはまだ学生でした。当時、中村和雄さんに対して「この弁護士さん、とてもいい政策を言ってる。市長になってほしいな」と思っていました。今回、中村弁護士が再チャレンジするにあたり、縁あって昨年6月くらいに私に声がかかり、中村さんと一緒に刷新の会のポスターに出ました。



大西 智也さん

いま振り返ってみると、選挙自体が楽しかっただけに、結果には逆に悔しさをすごく感じています。選挙戦のなかで、何か変わりそうな雰囲気気が伝わってきましたし、今回変え

なければいつ変えるのか、といった空気も幅広く生まれていったと思います。支持の広がりも一定の手ごたえも感じていました。ですから結果が出てから数日間はちよつと落ち込みました。でもいまは門川市長にちゃんと公約を実現してもらえるようにしつかりがんばっていかうと思っています。

川西 普段は全京都建築労働組合(京建労)左京支部で書記(書記次長)として、建築労働者の仕事や生活を守る業務に従事しています。私の場合は個人、また組織としても選挙戦を下支えする役割を担ってきました。私自身、前回の京都市長選挙で951票差で敗れた悔しさが気持ちの中にありましたから、この4年間、ずっと組織づくりを念頭において運動してきましたし、選挙に勝つための組織づくりとは何か、本当に真剣に考えました。

この4年間、京都で30人の建築仲間が経済苦を理由に自らの命を絶っているわけです。そのうち左京区の建築職人でみると8人です。縊死など普段はあまり見られない死因が記されている死亡診断書などをみると、本人や家族の方の悔しさが伝わってきて怒りがこみあげてきます。

自ら命を絶った職人さんは経済に敗れてしまったのです。でも技術・技能を持つ職人として、もつと仕事は続けたかったでしょうし、住まいやまちを守りたかったらうと思えます。その悔しさを思うとき、私たちはこの市長選挙は甲い合

戦として、命を絶った職人さんたちが「もう少し生きていけばよかった」と思えるような戦いをしなければいけないと思っていました。「仲間とともに」という戦いはできたと思いますが、もつとできたのではないか、そういう思いも強く残っています。

新しい戦いに向けて大きな力に

中村 今回の市長選挙では「青年の会」の事務局の一人として選挙戦に携わってきました。選挙戦を振り返ってマスコミはじめ、私の周囲でも「若い人が選挙戦を動かした」と言われますが、確かにそのような特徴が出た戦いでしたし、3・11以降、国や社会のあり方が問われた選挙で、特に青年の変化を感じた選挙戦だったと思います。

若い人に自己責任論がふりまかれ、政治や社会に対する閉塞感、あきらめ感があるなかで、3・11以降そういう流れに変化が生じてきました。今回は原発や風営法、雇用の問題などでいまの社会に対して何か声を上げていく、抵抗していく流れが顕著でした。「選挙に行こう」、「投票に行こう」と若い人が声を上げて、言葉を発した選挙だったと思っと思っています。これまで若い人と言えば、政治と社会が結びついていないと感じることも多かったのではないかと思います。ですが、今回は自分たちの生活と結びついたかたちで、政治や選

挙が身近になったのではないかと思います。

今後、京都で青年運動をしていく際にも非常に参考になることが多い選挙戦でした。なにより青年が楽しく、自由に議論しながら自覚的に取り組みを進めていった経験はすごく貴重だったと思います。

加藤 私も「青年の会」の事務局の一人としてかわりました。負けて残念な思いはありますが、街頭での対話やピラを受け取る人たちの真剣な反応、たとえばあちこちで原発をなくしたいという内容で対話が進みましたし、いまの青年の考え方が私たちにもよく伝わってきました。クラブ関係者のかでの運動が選挙戦を通じて広がっていく、よい意味で日々戦いに変化していく、そういう手ごたえを感じながら戦う選挙戦ですごくいな、おもしろいなと思いました。

選挙戦最後の1週間でいえば、中村陣営にはそういった広がりがあり、相手陣営にはその広がりを感じられませんでした。滅亡していくのは間違いなく向こうだな、と自信を持つことができた選挙戦でした。あらためて自分たちの側に大義があることを感じましたし、周囲の若い人たちが選挙戦を通じて成長していく姿も見ることができました。このことは次の組織づくり、新しい戦いに向けて大きな力になったと思います。

「ほんまはどっかんだ手応え」対話でつかんだ手応え

大西 今回、なぜこれだけの若い人が選挙戦の前面に出てきたのか、そこはどのように見えておられますか。たとえばこういった取り組みをしたら、このような反響があったとか、地域のなかでは若い人たちはどういった動きや反応をしたのかといったことも含めてお聞かせください。

中根 私は終盤の1週間、伏見区に入りました。そこで「青年の会」を立ち上げて最終日には4ラウンド宣伝をしようということになり、第1ラウンドは4回に分けて自転車で見えを回りました。駅前では怪獣のぬいぐるみを着たり、ピラを撒き対話を中心に取り組みました。第2ラウンドは商店街を練り歩き、第3、第4ラウンドは商店街などで宣伝行動を中

心に行い、時間も最終盤は夜の8時半くらいまで声をからしました。

一緒に行動した人のなかに、若い有権者は社会や仕事のことなど本当はどう思っているのか、そこにこだ

わって対話をしている人がいました。私自身、この人とその対話の中身からすごく多くのことを学ぶことができました。原発問題も「しゃあない」という人に「ほんまはどうなん？」と聞くと、「なくなったらいいと思う」と言います。「しゃあない」と言っているけれど、本当は多くの人たちが原発もなくなってほしい、消費税増税だって本当は勘弁してほしいと思っっている、対話はすごく大切だなと感じました。

川西 私自身、4年前の京都市長選挙に敗れたときに、「もつと有権者に依拠した選挙戦をするべきではないか」と感じていました。有権者が知らないから教えるという観点ではなく、有権者は知っている、だけど投票にはいかない、または反応しないといった選択をしているという観点で戦いを広げていく、接していくことが大切ではないかと思っただけです。僕らが有権者に依拠した接し方をどれだけ広げられるのか、私はこの部分はとても大切だと考えています。

3・11以降、多くの国民が心を揺さぶられた部分があると思います。言葉でいえば「絆」であるとか、「がんばろう」「助け合おう」、実際に現地に行った人、行かなくても何かしなければと思った人がいるなかで、何か心に響くものがあったと思います。全員が無関心ではなく、関心はあるけれど無関心という選択をしているのです。ですから問いかけをすることで有権者の心を揺さぶる、そういう思いをこめて、



中根 葉月さん

青年部プラスお兄ちゃん、おじさん層も少し加えて45歳以下というかたちでくり、「投票に行こう U(アンダー) 45 プロジェクト」を立ち上げました。

京建労左京支部では毎月2回、組合員訪問をします。前回の市長選挙までは「伝える」組合員訪問、「署名をするし、書いて」といったことを伝えていく訪問活動でした。い

まは組合員さんの懐に飛び込んで話を聞く。話を聞くと大抵の人は中村さんの政策と合致します。話を聞くことは市場調査なのです。この取り組みを続けてみると、頭一つ抜きんで話ができるのは原発問題でした。原発問題は公契約や住宅リフォームよりも幅広く関心がありました。

学んだ「負けても自分たちが主体的、前向きにやっつけていこうという姿勢」

大西 先ほど「しゃあない」と言う若者に対して、「本当は

どうなん」というところまで話し込んで、「原発はないほうがいいけど……」という本音を引き出すという話がありました。が、いまの川西さんの有権者に対する問いかけの話も共通するところがありますね。かぶせるのではなく、対話の中でそこまで接近しきれるのかどうか、という点ですが、今回の選挙戦を通じて大きな広がりを見せたクラブ関係の人たちと

のかかわりではどうですか。

中村 最初は木屋町中心にクラブや飲食店の人たちが、風営法の問題は自分たちの死活問題だということで選挙事務所に来られました。今までまったく選挙に行ったことがないという方も多く、フライヤー(ちらし)にも登場していただきましたが35歳で初めて選挙に行くという方もおられました。しっかりと話し込むなかで風営法だけではなく、原発や瓦礫の

処分・受け入れ問題が気になるとか、お互いの思いが少しずつわかってきました。私たちも風営法の問題点を知り、彼らも放射能や原発にすごく関心を持つようになってくれたと思っています。

大西 よく話し込んで聞いていると、彼らはあらゆることに対して「そんなにいきりめていないよ」と……。あれには勇気づけられました。

中村 そうですね、風営法だけじゃなくて原発もそうですが気になってる。そういう思いを多くの若い人が持っていることがよく伝わってきました。はじめは風営法が出発点でしたが、何度か話していくうちに原発や放射能、瓦礫の問題にも問題意識を持ってブログやツイッターで発信さ

れていました。身

近な問題から政治

や選挙につながっ

ていき、政治的覚

醒をみんなが体験

していった感じで

した。接している

なかで、本当に若

てくるだろうと感ずることがよくありました。フライヤーにもあった「革命前夜」って感覚を何度も感じて鳥肌がたつことがありました。

大西 クラブ関係の人たちと一緒にフライヤーを配布されましたよね？

中村 そうです。フライヤーが置かれていたお店の規模が3万枚、200軒以上といったレベルで、すごい数です。実際にはそこからさらにあちこちに広がっているわけです。地域を歩いてみると、ここにもあそこにもといったかたちでお店に張り出されていました。

川西 ブログにバーテンの方が「選挙に行くぞ」とフライヤーを持った写真で登場したり、僕たちから直接声がかかっていない多くの人たちから反響が出ていました。内容的にも彼らの心に響く部分があったのでしょね。ブログ、ツイッターも含めていえばすごい反響でした。

中村 すごくと思うのは中村和雄さんが負けて落ち込むのではなく、僕たち以上に前向きにクラブの方が風営法の問題に取り組み姿勢を鮮明にしています。主権者、運動者として主体になってきています。いままでも政治に期待して政治がやらないのであればだめだといういきりめ感があったと思いますが、いまは負けても自分たちが主体的、前向きにやっつけていこうという姿勢です。この姿勢は今回、僕たちが接したクラ



中村 陽介さん

会の変化が起こっ



川西 熟さん

ブの方、「ママ・パ
パの会」有志にも
共通しています。
僕たちは選挙を何
回も取り組んでい
ますし、まして勝っ
たことがあまりあ
りませんから、「負
けても」またやる
しかないなあ」と
いう感じですが、そういうことではなく運動的にまたやろう
ということなんです。このことはとても大切です。僕たちも真剣
に運動しないとイケないなとつくづく思いました。

未組織の人たちへのアプローチの仕方が見えてきた

大西 左京の場合、「投票に行こう」といったノボリを作っ
ていましたよね、あれはだれの発案でしょうか。

川西 僕の発案です。先ほどの話と関連しますが、僕らが
「投票に行こう」と呼びかけることは、呼びかけを受けた大
半の人が中村さんに投票するだろうと思っただけなんです。
そういう確信があったんです。同時に実際にノボリを持って
投票を呼びかける人も、あちこちでよく見かけるようになれば

ばらの服を着てメガホンを持ってということではなく、凛と
してノボリを持つ。そうあってほしいと思ったのです。そう
いう人をいかにつくっていくのか、チラシを配るのは私たち
でいいのですが、ノボリを持つ人たちが恰好も印象もよくす
る。そのことで票を真剣に取りに行く構え、かたちをつくり
たかったのです。

大西 今回の選挙をみていると、若い人たちがこれまでの選
挙のやりかたにとらわれずに自然に違和感なく取り組んでき
たという気がします。これまで夜中にビラを撒く、ましてや
木屋町で、ということは誰ひとり考えたことはなかったと思
いますが、あれは勢いも含めてすごかったですね。

中村 これまで木屋町で宣伝をしたことはなかったですから
ね。反応は大きかったと思います。

大西 取り組まれた時間帯でいえば何時くらいですか？

中村 22時とか23時くらいまでです。学生中心に社会人も含
めて取り組み、受け取りもよかったですよ。キヤッチのお兄
ちゃんも最初は「俺は19歳やから選挙にいけない」と言っ
ていました。ですがビラを見て翌日に「実は僕は20歳や」と言
いながら、「選挙にいきます」というわけですね。彼はちゃん
と「選挙に行きました。中村さんに入れました」と、私たち
に報告もしてくれています。似たような話はあちこちで生ま
れています。反面、酔っ払いにからまれたりといったことは



全京都建築労働組合（京建労）左京支部が「原発住民投票」を全面に押し出して、45歳以下の有権者を対象に取り組んだ投票呼びかけと投票率押し上げのキャンペーン（U-45プロジェクト）も大きな反響を呼んだ。

ありましたか…。

大西 木屋町を三条から四条まで歩いて宣伝もしましたが、
応援の声はよくかけられていましたね。それくらい風営法が
木屋町のところでは中心的な問題になっていましたし、私た
ちのビラは木屋町で知らない人はいないくらい知れ渡って
いました。

これまでの選挙戦は組織された部隊が中心になって、そう
でない部分や有権者に支持を呼びかけるというかたちでした
が、今回、組織された部隊とそうではない人たちとの境界線
に変化が起きてきています。境界線がなくなったとまではい
きませんが、どうやって組織された人たち以外の人たちにア
プローチすればいいのか、私たちにも見えてきた気がしま
す。これまでの教えてあげる、知ってもらおう、支持してもら
うといったかたちからちよつと変化してきていますね。

広がりのおかげをつくった12月23日の企画

加藤 「青年の会」として12月23日にいま話題の東京・高円
寺の「素人の乱」主宰の松本哉さんを呼んで、クラブメトロ
で原発関連の企画を持ったのですが、これが結構、面白く
て話題になりました。京大で話題になったユニオンエクスタ
シーといったメンバーもきてくれたり、幅広い人たちがつな
がって一緒に戦えたことが大きかったと思います。

大西 12月23日の取り組みを最初に仕掛けたのは？

中村 最初、「青年の会」事務局メンバーなどで松本哉さん呼びたいということから話が始まりました。要請したら松本さんが「いいよ」と了解してくれました。フットワークの実に軽い人でした。会場も最初から今までとは違った会場



12月23日東西脱原発トークバトル@ CLUB METRO

で、とライブハウスを狙っていたのです。事務局であちこちのライブハウスをあたったのですが、メトロがたまたまキャンセルができたこともあってメトロに落ち着きました。「メトロ大學」で核兵器や原発の問題を取り組んでいたこともあって、メトロ大學としても協賛したいということになり、私たち「青年の会」と一緒に取り組んだ企画になりました。

大西 12月23日のメトロでの取り組みが今回の運動の広がりをつくった直接のきっかけになっていきますよね。会場から「僕も原発労働者だった」という声飛び出したり…。

加藤 クラブのオーナーが急に質問して、原発問題で具体的にどうするのか、中村候補に聞かはったりね。

中村 企画終了後のデモも楽しく自由な発想で行いました。その後も風揚げ宣伝をしたり、有志で「若者よ！選挙へ行こうデモ」をしたりしました。

大西 いままでになく若い人たちが自由に運動をしていたことは確かです。

中根 政治に対してもそうですが、みんな生活をしているなかでの思いがすぐありますからね。もっと給料が高ければとか、もっと時間があればとかね。交流するなかで中村さんを応援しようと「青年の会」も立ち上がっていったわけです。思いを大事にしなごらお互いが交流してなぜ中村さんを応援するのか、中村さんが市長になったらどうなるのか、対

話をしながらつながっていった気がしています。そういうところがとても大切だなと思います。一緒に行動するにしても、どのように思っているのかわからないまま一緒に行動するのと、みんなの思いを知って一緒に取り組むのでは全く違いますからね。

加藤 やはり3・11以降、青年がリアルに自分の思いを自分の言葉で表現し始めたことがあると思いますし、今回はいま

大西 大きく広がった選挙戦のかたちができることはよくわかりました。ですが、その反応とは逆に投票率は低かった。この点はどうですか。

川西 メディアはじめ多くの人たちの間で二極対決とか、共産対非共産などと言われていましたが、僕らにとっては関係ないですね。僕たちはある意味面白いかどうかです。組合の中や左京区の街頭の雰囲気で見ると、左京区の票は反応通りの結果が出ています。2年前の知事選では左京区で見る限り、反応と違う結果が出て私自身も混乱したというのが正直に思ったところです。

あちこちの青年に声が届くような組織を

中根さんが言ったように人と人が正面から向き合うという部分が表現されていたと思います。クラブの関係者も中村（陽）さんが言っていたようにきっかけは風営法ですが、一緒に活動をしていくうちに原発はあかん、放射能瓦礫の受け入れはあり得ないなど、政治と社会が結びついていることを実感させられました。

30代の人たちも捨て置けない青年の部分です。特に生活に実感した部分、地に足がついた部分、新しい命を抱えた部分、その土地に住む決意を固めた部分は心情的な変化が出てくる部分です。そこに向けて僕らが政治という固いことではないのですが、世の中をどのようにプレゼンテーションしていくのか、そこが大切だなと考えています。そのことを続けていけば希望はあると思います。

中村 ある新聞では前回の市長選の場合、20代で選挙に関心があつた人が49%でしたが、今回は71%と報道されています。今回はめちやくちや若者の関心が高まっています。私



加藤伸太郎さん

の周囲でも今回、初めて投票に行つたという人が多く見られました。中村さんのブログ「若者文化」の発信が若者の間で急速に広がり、ツイッターのリツイートで発

信した内容を広める行為」というのがありますが、それが5000を超えていました。でも正直それが本当に結び付くのかなと一抹の不安も感じていましたが、中村さんの若者文化の発信をクラブや飲食店の方の協力をいただきフライヤーというかたちにしたのです。そのフライヤーも多くの若者がツイッターで拡散していつて、「今回初めて投票に行く」「京都を変えよう」という言葉が飛び交いました。若者が声を上げたこと、初めて投票にいった人が多かったことは今後大きく影響してくると考えています。

声をあげる手段を一度知ると簡単には黙らないですらね。「投票に行こう」というデモもいままでもよりも楽しく、とても面白かったですね。これまでは雇用問題とか原発を何とか

いるやろと思つていましたが、テレビの速報で出口調査では若者票は半々くらいと出て、ちょっとびっくりしました。

川西 今回、左京区でみると白票をいれるといつてきかない人が結構いました。前回の村山さんに期待していて落胆した人もあれば、期待し続けて白票にした人もいろいろです。白票行動は若い人からおっちゃん世代までまんべんなくみられました。感触でいえば投票に行く意思はあるけれど選択肢がないという構図がみてとれました。対話してもつと時間があれば広がるかなと思つたのですが、街頭ですら時間がありません。相手もどこかに行く途中だったり、チャリンコにまたがったままではそう突っ込んだ対話にはなりません。やはり議論する場所をどうつくるのか、というより、みんなもそういういった機会、場所を求めているのではないかと感じています。

投票に行くという行動に移す人は白票をいれますが、心の白票を持ったまま投票に行かない人もいるのだろうと思えます。それと無関心、知らなかった層を区別することはすごく難しいなと思つています。そうなる僕らがどれだけ対話するか、接する機会を設けるか、そこにかかっているのではないかなと思えます。

中根 投票日の午後、電話をしたのですが、そのうち3人が市長選挙があることも知らなかったのです。投票に行くとい

したいという要求を話していくなかで、だから政治を変えようということでした。そうではなく直接的に選挙に行つて政治を変えようという訴えは街頭でも反応がよかったです。**加藤** 若い人が投票にいかないということ、政治や社会のことをなにも考えていない、関心がないということ結びつけてとらえてはいけないないつも考えています。街頭で若者に接してもやはりいろいろ思ひはあつても「政治」とか「政治家」に対する不信があつたり、争点ばかりも仕掛けられたりするなかで、二重三重に障害があることがわかりました。

たとえば貧困の問題や原発の問題などを大学で研究しているような子でも選挙に行かない。そういう子もいました。ですが、僕たちが相手の思いに対して丁寧に働きかければ、必ず最後は支持するとうかたちにながつていきました。そういうことがもつと大きな規模でできないといけないと思います。いずれにしても、こちら側の組織が弱いがゆえに起こっている面もありますから、あちこちの青年に声が届くような組織をつくらないといけないと痛感しています。

鍵は若者とどれだけ対話し、どれだけ接する機会をもてるか

大西 僕らの感覚でいえば20代、30代は中村さんが圧勝して

う前にどうしてもやらないといけない仕事があつたり、選挙権も当たり前にあるもので歴史のなかで勝ち取つたという意識もないのかなと思います。私でも振り返つてみると、選挙は周囲がワイワイ言っているだけと感じていた時期もありました。でも知り合いから声をかけられたり、話す場があつて選挙は大事な、この人に入れたい、自分の思いはどうなんやろとか、私にはそういう場がありました。京都府・市政がどうなつていのか、よくわからない時期もありましたが、いまは4年後に向けてどうするのか、しっかりと考えていこうと思つています。

大西 投票率に関して周囲の反応はどうでしたか。

中根 民意が反映されていないという声はよく聞きますね。

大西 門川さんにしても有権者の19%程度の支持ですからね。学生はどのようにみているのでしょうか。

中根 左京の学生の子は投票率が低いのは、あえて投票に行かない人がいたのかなと話して、いました。政党選挙じゃなかったのに共産対非共産みたいな図式で言われることが大きく影響しているとは思っています。

投票日前日にサークルの学生にメールを送つた人がいました。僕は中村さんを応援しているということと、あなた自身が門川さんと中村さんの政策を比べてみて選んでみてくださという内容のメールでした。23歳の子から「投票所はどこ

やった」「初めて投票に行ってくるわ」と電話がかかってきたそうです。その子は前日のメールを見て投票に行こうと決めたとのことでした。現市政について、市立看護学校廃止の問題でも発展させていくと表明しながら、直後に廃止の案を出して通ってしまったことなどをメールでやりとりしている、その子の弟も看護系の学校に通っているのですが、学費がすごく高いと言っていました。友人は自分が話したことでその子が投票に行ってくれたことがすごくうれしいと話していました。

若者の居場所をどうつくるのか、 求めていくのか

川西 うちの若手の役員ですと、30代前半、20代の役員などは目標に対して届かない数字ではないという認識を持っていくことがすごいなと思います。近づいたけれども高く分厚い壁だとか、組織同士の戦いだといったものではなくて、目標に対して広げ方が足りなかったという認識です。決して驕って言うわけではありませんが、ある意味、青年が広げている経験、その広げ方も含めて年齢を超えて学ぶことも大切なのではないでしょうか。そうすれば今回の3万という数字は押し返せる数字かもしれないとみんな話していました。建築の現場での接し方ももっと考えないといけないな、と

いう話も出て、4年後へのステップアップへ向けて、そこは確信を持った選挙だっと思います。次の選挙では中間層になるようなメンバーたちがそういった点に気付いたことは大きいのではないかと考えています。私自身、この選挙戦を通じて素晴らしい人づくりができたと感じています。

大西 そう思うと先ほどのメトロ大学でのトークバトルの企画や、クラブ関係の人たちと一緒に取り組んだ宣伝や会議からみても、新しい方法、方向への手がかりを確実につかんだという気はしますね。これまで試行錯誤しながらなかなか出口が見えずにきていたようなところがありますが、この選挙戦ではちよつとした確信が生まれてきています。青年層中心につくった広がりがかれまでにない規模だったことは事実です。内部的には新しい人がどんどん参加してきていますし、外へ向けて打って出る広がりが増えてきたことが大きな特徴ではなかったかと思います。共通するのは若者の居場所をどうつくっていくのかだと思います。これが、これからの私たちに課せられた大きな課題でもあります。敗れましたでしたが、実際に多くのことを学び、自信と確信を持つことができた選挙戦だったと思います。戦った経験、学んだ力、一緒に戦ってくれた多くの人たち、そういう財産を誇りにして明日からまた取り組んでいきましょう。ありがとございました。